ると思ふ。「はしがき」の區分法は、孔明が私的生活から公的生活へ入つたところに意義を認めるもの、本文の區分法は、孫權、劉備の連合により曹操の天下統一の希望が赤壁の戰に於て挫折し、こゝに天下三分の形勢が始まらうとするといふ點に時代の轉期を認めるもの、前者は孔明の傳記を書く立場、後者はこの時代の歷史全體に就いての觀方、と言ひ得るであらう。さう考へ得るならば、著者はこゝで歷史家としての姿をうつかり出すことによつて、かへつて孔明の傳記に徹するといふ意圖が幾分か稀薄になつてゐるやうに思はれるのである。

本書を東洋史を專攻してゐない人に讀ませたところ、言葉が少し難しすぎるといふ返事であつたが、それも注意して讀めばそれほど困難でもないであらう。この程度の難しさは、文章を下手に讀みやすくしようとして內容までも通俗に墮してしまふよりはるかにまさるものである。一般的讀物でありながら、隨處に假借するところなき態度で鋭い歷史理解がきらめいてゐる本書は敬服に値すると思ふのである。（支那歷史地理叢書第八、四六判一八八頁、圖版四、地圖一、昭和十五年十月、富山房發行、定價壹圓貳拾錢）〔小畑龍雄〕

東亞論叢　第三輯

昨年七月にこの論叢の第一輯がはじめて刊行せられ、第二輯が今年二月に出たのであつて、收錄する所の論文には雄篇力作が多く、大に斯界の注意を惹いてゐたのであるが、最近にまた第三輯が公けにせられた。所載の論文は次の十篇で、今度は殆んどすべてが滿洲蒙古關係である。

「滿洲の地域性」――その學的方法に就いて――（小田內通敏）

史學と地理學とを一元化した研究による、滿洲の地域性の科學的研究方法を說かれたものである。その例として龍江省甘南縣の地域性が論じられ、また地域性の研究の上に於ける航空寫眞の效用、北米大陸と滿洲との相似關係などが說かれてゐるのも興深く、われわれ史學者關係のものにとつても頗る示唆深い論文である。

「遼西の交通路に就いて」（園田一龜）

滿洲の古地理については「滿洲歷史地理」「滿鮮地理歷史研究報告」に收められた諸研究をはじめとして今まで非常に多くの研究が發表せられて居り、ことに近年は各地に實地踏査が行はれ、且つ正確な地圖も作られてこの方面の研究はめざましい進歩を遂げた。この論文はこれら研諸究の結果と著者多年の勞作の結果とを綜合して唐代より淸代に亙る遼西の交通路の變遷を說いた勞作であつて、數年前に一度收書月報（二十六號）に揭げられた所のものである。この街道は歷代政府の遼東に於ける根據地と、遼河の渡河點とによつて規定づけられるものであつて、著者の說く所に從へば、唐・遼・元・明代には遼陽より遼河下流の三岔河を渡り北鎭に達する路をとり、金代には阿城――奉天より遼河の中流を渡つて北鎭に至る路がとられ、この渡河點はまた上都に至る街道として元代にも用ゐられ、最後に淸代には奉天より巨流河遼河を渡り北鎭または義縣に至る上流渡河の路が用ゐられたといふ。地名

の比定は妥當であつて、元代の上都に至る路の崖頭驛を金代の要衝梁魚務にあて、清代の路のうち、都爾鼻(杜爾筆)を遼河沿ひの地と遼西との二ヶ所の同名異地とするなどは注意せらるべき點であらう。

「漢魏時代に於ける西北支那の開發」(松田壽男)

支那と西方との交通路上に介在する高昌王國と河西王國との特異性がこの著者によつて指摘せられたのは六七年前のことで、爾來私は大きな期待をもつてこれが研究の發表をまつてゐたのだつた。一昨年に至つて河西王國の隣國である吐谷渾が河西と同樣に東西貿易の仲繼者として活躍したことを論じた「吐谷渾遣使考」(史學雜誌四八編十一、十二號)が發表せられ、そしていまこゝに河西王國史の序論ともいふべき本論が公けにされたのである。これの內容は、河西地方の形勢論と、武帝時代にはじまつたこの地方への漢人の强制移住が先づ說かれ、次に後の河西王國の先驅と見らるべき王莽時代の竇融の活躍とこの地方の獨立性、及びこの頃より目立つて來た漢人の自由移住が述べられ、それら漢人の手によつて行はれた水利の開發が之につゞき、最後に河西地方の最も注目すべき特色である國際貿易上の仲繼的地位が論ぜられてある。著者みづから云はれる樣に、實際漢魏時代の河西に關する史料は多くはないがその間隙は五涼時代の類似事象で巧みに說明せられてゐる。本篇の終りの言葉に依れば、著者は之に引つゞいて五涼時代の河西の研究を公けにせらるゝとのことで、われわれはこれを刮目して待つことゝしたい。

「滿洲族社會の停滯性」(三上次男)

以前に故稻葉博士に依つて滿洲族の還元性といふことが唱へ出され、その後も滿洲族の社會組織に關しては和田博士をはじめとして十指に餘る研究が發表せられて、或は還元性を肯定し或は否定して、活潑な論戰が繰返されてゐるが、最近に至つて小川裕人氏が「滿洲民族の『還元性』とその發展に就いて」(滿蒙史論叢第二)に於てこれを肯定する立場をとられたに對して、著者は滿洲族社會の發展の如く見ゆるものは漢地に入つた一部貴族の間の一時的の現象であつて、滿洲族の社會自體はその間に發展を見せてゐないと說かれてゐる。この問題はいづれもこれの專門家がそれぞれの立場から意見を出されることであらうから、すべてそれに期待することゝする。

「元の上都並に大都の平面に就いて」(駒井和愛)

上都に關しては、著者が先年行はれた踏査の結果を「東方考古學叢刊」の一つとして近く公刊されるとのことであつて、こゝではその平面の極めてあらましが述べられてゐるにすぎない。大都に關しては、周禮に見ゆる「左祖右社、面朝後市」の制に則つたものと從來考へられてゐたのに對して、さきごろ村田博士が可汗のオルドの南方には臣下の帳幕を建てしめぬといふ蒙古の風習に從へるものとの意見を出されたが(建築學會論文集第九)、著者は更に大都の建設事業の擔當者なる劉秉忠の傳を證として、これが全く支那思想によつて設計せられたと、舊來の意見を支持せられたものであつて、私もそれに贊成である。大局に關係のないことで

あるけれども、村田博士がルブルキの紀行のビーズリー譯本を引用せらるゝに對して、著者は完譯本と號してヘルブスト譯本を引用して居られるが、これは一九二五年版であつて、アナスタシウス・ファン・デン・ウィンゲールト校訂版以前のものであり、從つて嚴密な意味でのルブルキ紀行の完譯本とは云ひ得ないものである。

「清代の滿洲に於ける糧米の漕運に就いて」――特に滿洲植民史の一面として――（周藤吉之）

漕運に關する研究は今までにも相當に發表せられてゐる。そして普通に漕運と云へば、江浙の地方と陝西・河南或ひは河北に置かれた首都との間のそれを指すのであるが、この論文に說く所のものは、副題に示されてある如く、滿洲植民史の問題であつて、さういふ意味の漕運ではない。すなはち、清初のころは滿洲に住民が少く然も軍事上の必要から多數の駐屯軍を置いてゐたので、糧米を山東地方より移入してゐたのであつたが、滿洲への植民が進展し、農業が發達してくると、雍正・乾隆以後よりは逆に滿洲より直隸・山東、更に江淮地方にまでも農產物を移出するやうになる。その發展の過程が、植民の發展と並行して論じられてゐる力作である。

「蒙古文語の動詞活用に於ける介入母音について」（服部四郎）

この著者は今春「蒙古語文語の動詞語尾 juγui (cuxui)～jügü (cükü) について」（東方學報東京十一ノ一）、「ブリヤト方言の分類」（蒙古學報第一）の二篇を發表され、前者は從來充分に說明せられてゐないこの動詞語尾の意義・用法を滿洲語と比較することに依つて明らかにし、後者は著者の實地調査の結果に基づいてポッペ教授の分類法を批判したものであつて、私は共に興味深く讀んだのであつた。こんどのものは、後者に類したものであつて、ポッペ教授の「書寫蒙古語文典」の說を逐一批判して以て介入母音の法則を立てた力作である。

「匈奴婦女の顏色『馬支』に就きて」（江上波夫）

匈奴の風俗習慣に關して、著者は既に「匈奴の飲食物に就きて」（東洋學報二〇ノ二）「匈奴の婦人の冠帽『頰姑』に就きて」（人類學雜誌五三ノ六）など數篇を公けにして居られる。こんどのものもそれらと一聯をなす作であつて、この馬支の字音が閼氏と同音であると藤田博士の說に從ひ、これを顏に塗つたのは既婚婦人であつたことを示し、匈奴の妻の名閼氏が之に由來してゐることを說き、更にその塗り方を考へ、その風俗の起原を西方に求めたものである。

これに續いて「蒙古法の法源」（ウェ・ア・リヤザノフスキー著、靑木富太郎譯）、「シベリア・蒙古及び歐露の異族間に於けるシャーマン教」（ウェ・エム・ミハイロフスキー著、高橋勝之譯）の二篇の飜譯があり、いづれもかなりの長篇であつて、興味深い研究である。（菊判四三五頁、昭和十五年九月二十五日、東京文求堂發行參圓六拾錢）（藤枝晃）